千里金蘭大学紀要　16　101－107（2019）

〈原著論文〉

1歳6か月児の母親の育児ストレスと養育態度・夫婦関係との関連

Relationships between their mothers' parenting stress of 1.6-year-old children and parental attitudes toward childrearing and marital relations

田中　恵子[1]

要旨

本研究は母親の育児ストレスと母親の養育態度,夫婦関係との関連を明らかにすることを目的とした。育児ストレスは日本版PSI-SF（Parenting Stress Index-Short Form）により測定した。母親466名を対象に自記式質問紙調査を実施した。250名のデータを得た（回収率53.7%）。分析は属性および夫婦関係とPSI-SFの比較はｔ検定,３つの養育態度とPSI-SFの比較は一元配置分散分析を用いた。

（１）母親の育児ストレスの影響要因として性差･出生順位･職業･健康状態･家族形態が認められた（P<0.05）。（２）許容的養育態度の母親は権威的養育態度の母親よりも育児ストレスが有意に高かった（P<0.05）。（３）夫婦の愛情関係が低得点群の母親は高得点群の母親よりも育児ストレスが有意に高かった（P<0.05）。

Abstract

The objective of this study was to investigate the relationships between their mothers' parenting stress and parenting behaviors, and marriage relationships. Parenting stress was measured by the Japanese version of PSI-SF. A questionnaire survey was conducted of 466 mothers who visited us for their infants' checkup at 18 weeks of age, and responses were obtained from 250 mothers (response rate: 53.7%). The analysis was t-test for comparison of attributes and marital relations and PSI-SF, one-way analysis of variance for comparison of the three parental attitudes toward childrearing and PSI-SF.

（１）The results revealed showed that the children's sex, birth order, health conditions, occupation, and family form were associated with the mothers' parenting stress（P<0.05).

（２）The degree of parenting stress was significantly higher in mothers with permissive childrearing style than in mothers with authoritative childrearing style（P<0.05).

(3) Mothers with low scores in affectionate relationships with their partners recognized parenting stress significantly more frequently as compared to mothers with high scores（P<0.05).

キーワード：育児ストレス，養育態度，夫婦関係
parenting stress, parental attitudes toward childrearing, marital relations

Ⅰ．緒　言

現代の日本社会では，核家族化，少子化，地域社会とのつながりの希薄化といった状況が進行してきている。主たる養育者である母親は，乳幼児に関わる体験が少ないことや育児経験不足が原因となり，不安やストレスを感じやすい。

厚生労働省（2017）は，子ども虐待による死亡事例（第４次報告）において，心中以外の虐待死は49人で，主たる加害者は実母が30人（61.2%）と最も多かったことを報告している。連日テレビや新聞で児童虐待の事件が報道される中，育児期の母親の児童虐待に対する社会的関心はかつてないほどに高まってきている。中谷ら（2006）は，虐待的行為に影響を及ぼす母親の認知特性は，子どもに対する否定的認知ではなく，母親の自尊感情の低さや育児ストレスの高さからもたらされる被害的認知であることを明らかにしている。したがっ

1　Keiko TANAKA　千里金蘭大学　看護学部

受理日：2019年９月６日
査読付

て，周産期ケアを担う看護職として母親の育児ストレスの関連要因を把握し，育児ストレス軽減に向けた支援を検討していくことは重要である。

2015年度からの健やか親子21（第２次）では，子育てに取り組む親が育児に余裕と自信をもち，親としての役割を発揮できる社会を構築するために，「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」を重点課題①に掲げている。また，妊娠期から子育て期に至るまでの切れ目ない支援を目的に，厚生労働省は2014年度に妊娠・出産包括支援モデル事業を創設した。「子育て世代包括支援センター（日本版ネウボラ）」は2018年の時点で，全市町村の約44％にあたる761市町村，計1,436か所と全国に広がってきている（厚生労働省，2018）。

日本においては，1990年代頃より育児ストレスや育児不安に関連した研究がされてきた。先行研究では，母親の育児ストレスに関連する母親側の特徴･子ども側の特徴･家族関係･ソーシャルサポートの側面より，様々な要因が明らかにされてきた（吉田，2012）。しかし，乳幼児をもつ母親の育児ストレスと養育態度について検討した研究は少ない。加藤ら（2002）は，母親の育児ストレスは子どもへの干渉的な養育態度を強め，間接的に子どもの社会性の発達に影響することを述べている。また，永井ら（2006）は，親の養育態度に影響を及ぼす要因に関して，第２回家族についての全国調査（NFRJ03）を用いて探索的な分析を行っている。女性は，子どもや家族のことで悩んだり，家族から理解されていない，家庭内での負担が重いほど，夫からの情緒的サポートが少ないほど，夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向が強い。性別役割分業の中で男女それぞれに課されている負担やそれによるストレスが，弱い立場にある子どもに向けられていることを示唆している。このように，育児ストレスは子どもの発達や養育に影響する可能性があることから，育児ストレスと養育態度との関連を検討していくことは意義がある。

そこで，本研究では１歳６か月児をもつ母親の育児ストレスと養育態度，さらに養育態度に影響を与える夫婦関係の関連を検討することを目的に研究を行った。１歳６か月健診に着目した理由は，自我の芽生えといわれている時期に行われる健診であり，研究対象者を確保しやすいと考えたからである。

本研究において，育児ストレスは，「親としての要求に直面しそれに応えようとする個々の挑戦の結果生じる一連の心理的および生理的プロセスである（兼松ら，2006）」と定義する。

Ⅱ．研究方法

１．データ収集期間

2017年２月20日～４月20日。

２．対象者と依頼・回収方法

対象者はA県のA市保健センターの１歳６か月児健診に訪れた母親である。対象者には，研究の趣旨と自由意思による参加であること，研究協力の諾否によって不利益を被らないこと，記入と投函をもって同意とみなすことを文書と口頭で説明し，同意が得られた後，調査票一式を渡した。なお，調査票の回収は自宅で回答後，郵送により返送してもらった。

３．調査内容

質問紙は，基本属性，育児ストレスショートフォーム（Parenting Stress Index-Short Form: 以下PSI-SF），親の養育態度尺度，Marital Love Scaleで構成される。

１）基本属性

母親の年齢・職業・健康状態・睡眠時間，父親の年齢・職業，子どもの性別・出生順位，家族形態である。

２）PSI-SF（19項目）

PSI-SFは，Abidinら（1995）によって開発された原版36項目を基に，兼松ら（2006）が日本語版に開発した尺度である。日本版PSI-SFの開発者の兼松ら（2006）に使用許可を得て用いた。「親自身に関するストレス」「子どもに関するストレス」項目の２側面を下位領域とする尺度である。「まったく違う」の１点～「まったくそのとおり」の５点までの５段階評定である。

３）親の養育態度尺度（13項目）

親の養育態度尺度は，作成者の中道ら（2013）に使用許可を得て用いた。子どもへの応答性に関する８項目，子どもへの統制に関する５項目，計13項目からなる。「全然あてはまらない」の１点～「ぴったりあてはまる」の４点までの４段階評定である。

統制得点が平均値以上の者のうち，応答性得点が平均値以上の者は「権威的態度（応答性＝高，統制＝高）」，応答性得点が平均値以下の者を「権

威主義的態度（応答性＝低，統制＝高）」，統制得点が平均値以下の者は「許容的態度（統制＝低）」として分類した。

権威的態度は応答性と統制のいずれも高いタイプで，子どもと温かく，協調的な関わりを持ち，その温かさとの下で柔軟に統制を行うような特徴がある。権威主義的態度は，統制は高いが応答性は低いタイプで，子どもを服従させ，子どもの心理や行動を厳しく統制するような特徴がある。許容的態度は，応答性は高いが統制は低いタイプで，子どものどのような行動でも受容するような特徴がある（Baumrind，D.1967，1971）。

４）Marital Love Scale（10項目）

Marital Love Scaleは夫婦の愛情と親密性を評価する尺度であり，作成者の菅原ら（1997）に使用許可を得て用いた。「全くあてはまらない」の１点～「非常によくあてはまる」の７点までの７段階評定である。

４．分析方法

統計分析にはSPSSver.12.0を用いた。属性（母親：年齢・職業・健康状態・睡眠状態，父親：年齢・職業，子：性別・出生順位，家族形態）および夫婦関係とPSI-SFの比較には，ｔ検定を用いた。３つの養育態度とPSI-SFの比較では一元配置分散分析を用い，有意差がみられた場合には，Bonferroni法による多重比較検定を行った。

Ⅲ．倫理的配慮

本研究の主旨とプライバシーの保護，調査の参加は自由意志に基づき，匿名調査であることを文書と口答で説明し，記入と投函をもって同意とみなした。本研究は大和大学倫理委員会の承認（2017年-16）を得て行った。

Ⅳ．結　果

１．対象者の属性

調査用紙の回収数250名，回収率53.7％であった。母親の年齢は34.5±4.49歳，専業主婦は136名（54.4％），就労している母親は114名（45.6％）であった。父親の年齢は36.3±5.89歳，会社員は198名（79.2％）であった。子どもの性別は男児112名（44.8％），女児138名（55.2％），出生順位は第１子が141名（56.4％），第２子以上が109名（43.6％）であった。家族形態は核家族が237名（94.8％），二世代家族13名（5.2％）であった（表１）。

表1　対象の属性　　n=250

項目		実数	%
母親年齢	20～29歳	32	12.8
	30～39歳	176	70.4
	40～49歳	42	16.8
	平均年齢	34.5±4.49	
母親の職業	専業主婦	136	54.4
	仕事をしている	114	45.6
母親健康状態	心身ともに快調	194	77.6
	どこかに不調あり	56	22.4
母親睡眠時間	6 時間以上	180	72.0
	6 時間未満	70	28.0
父親年齢	20～29歳	19	7.6
	30～39歳	163	65.2
	40～49歳	68	27.2
	平均年齢	36.3±5.89	
父親の職業	会社員	198	79.2
	公務員	28	11.2
	自営業	18	7.2
	その他	6	2.4
子ども年齢	平均月齢	1.7±0.09	
子性別	男	112	44.8
	女	138	55.2
子出生順位	第1子	141	56.4
	第2子	88	35.2
	第3子	18	7.2
	第4子以上	3	1.2
家族形態	核家族	237	94.8
	二世代家族	13	5.2

２．各尺度の得点結果

１）PSI-SF得点

母親の育児ストレスの平均点は，子どもの側面18.6±5.10点，親の側面21.2±7.04点，総点39.7±10.91点であった（表２）。

２）母親の養育態度得点

母親の養育態度の平均点は応答性得点3.4±0.38点，統制得点3.1±0.53点であった。統制得点が3.1点以上の者のうち，応答性得点が3.4点以上の者は「権威的態度」，応答性得点が3.4点以下の者を「権威主義的態度」，統制得点が3.1点以下の者は「許容的態度」として分類した。権威的態度79名（31.6％），権威主義的態度47名（18.8％），許容的態度124名（49.6％）であった。

表２　母親のPSI-SFスコア

項目	平均値±標準偏差
子どもの側面	18.6±5.10
3. 私の子どもは，元気すぎて私が疲れる。	3.2±1.04
4. 私の子どもは，他の子どもと比べて集中力がない。	2.3±0.94
5. 私の子どもは，私が喜ぶことはほとんどしない。	1.4±0.63
6. 私の子どもは，とても不機嫌で泣きやすいと思う。	1.7±0.89
7 私の子どもは，他の子どものように笑わない。	1.2±0.55
8. 子どもがすることで，私がとても気になることがいくつかある。	2.3±1.13
9. 私の子どもは，小さなことにも腹をたてやすい。	2.0±1.01
10. 私の子どもは，他の子どもよりも手がかかるようだ。	2.1±1.03
11. 私の子どもは，いつも私につきまとって離れない。	2.5±1.08
親の側面	21.2±7.04
1. 私は親であることを楽しんでいる。	1.7±0.81
2. 子どもの世話について問題が生じた時，助けやアドバイスを求める人がたくさんいる。	2.0±0.92
12. 私は物事をうまく扱えないと感じることが多い。	2.5±1.09
13. 私は子どもを産んでから，やりたいことがほとんどできないと感じている。	2.8±1.08
14. いつも，子どもが何か悪いことをすると，私のあやまちだと感じてしまう。	2.2±0.97
15. 子どもを産んでから，私の夫は期待したほど援助やサポートをしてくれない。	2.3±1.19
16. 子どもを産んだことにより，夫との問題が思ったより多く生じている。	2.4±1.19
17. 私は孤独で，友達がいないと感じている。	1.7±0.89
18. この6か月間，私はいつもより病気がちで痛みを感じることが多かった。	1.8±1.14
19. 私は以前のように物事を楽しめない。	1.8±1.01
総　　点	39.7±10.91

３）夫婦関係得点

母親の夫婦関係の平均点は40.9±11.95点であった。平均値以上の対象者を高得点群135名，平均値以下の対象者を低得点群115名とした。

３．母親の育児ストレスと属性との関連

属性では，専業主婦，健康状態に不調がある，男児の母親は，「子どもの側面」および「親の側面」の両側面において，有意にストレスが高かった（P<0.05）。子どもの出生順位では１人の母親は，２人以上の母親よりも「子どもの側面」に関するストレスが有意に高かった（P<0.05）。家族形態では，核家族の母親は二世代家族の母親よりも「親の側面」に関するストレスが有意に高かった（P<0.05）（表３）。

母親の年齢・睡眠状態，父親の年齢・職業の項目は有意差がみられなかった。

４．母親の育児ストレスと養育態度との関連

母親の育児ストレスと養育態度との関連は，分散分析の結果，「子どもの側面」に関する育児ストレスにおいて有意差がみられた（F=9.636，P<0.05）。多重比較の結果，「許容的態度」と「権威的態度」，「権威主義的態度」と「権威的態度」との間で有意差がみられ（P<0.05），「権威的態度」である母親の「子どもの側面」に関する育児ストレスが低いことがわかった（表４）。

表４　PSI-SFと養育態度との関係　　n=250

	養育態度									
	Ⅰ権威的 (n=79)	Ⅱ権威主義的 (n=47)	Ⅲ許容的 (n=124)	F 値		多重比較 Ⅰ-Ⅱ群間		Ⅰ-Ⅲ群間		Ⅱ-Ⅲ群間
子どもの側面	16.6±4.69	18.9±4.42	19.8±5.25	9.636	*	0.048	*	0.000	*	0.865
親の側面	19.8±7.59	21.1±6.22	22.1±6.87	2.788		0.951		0.058		1.000
PSI-SF総点	36.4±10.34	39.2±10.63	41.9±10.91	6.701	*	0.207		0.001	*	0.802

*p<0.05

表３　PSI-SFと属性要因との関係　　n=250

	性別			出生順位			母親の職業			母親の健康状態			家族形態		
	男 (n=112)	女 (n=138)		第1子 (n=141)	第2子以降 (n=109)		専業主婦 (n=137)	職業あり (n=113)		快調 (n=194)	不調 (n=56)		核家族 (n=238)	二世代家族 (n=12)	
子どもの側面	19.7±5.33	17.7±4.73	*	19.2±5.59	17.9±4.29	*	19.7±5.38	17.3±4.43	*	18.1±10.46	20.4±4.52	*	18.6±5.11	19.1±5.00	
親の側面	22.2±7.29	20.4±6.75	*	21.7±7.13	20.5±6.90		22.5±7.36	19.7±6.34	*	19.9±6.37	25.7±7.46	*	21.4±7.13	16.9±2.31	*
PSI-SF総点	41.9±10.96	37.8±10.55	*	40.9±11.18	38.0±10.37	*	41.9±11.64	37.0±9.30	*	37.8±10.46	46.1±9.97	*	39.8±11.10	36.0±5.80	

*p<0.05

５．母親の育児ストレスと夫婦関係との関連

夫婦関係では，高得点群の母親は，低得点群の母親よりも「親の側面」に関するストレスが有意に高かった（P<0.05）
（表５）。

表５　PSI-SFと夫婦関係との関係　　n=250

	高得点群 (n=135)	低得点群 (n=115)	t 値	有意確立	
子どもの側面	186.±5.05	18.7±5.17	-0.199	0.843	
親の側面	19.9±5.17	22.7±6.92	-3.248	0.001	*
PSI-SF総点	38.4±10.74	41.4±10.32	-2.225	0.027	*

*p<0.05

Ⅴ．考　察

１．母親の育児ストレスと属性との関連

本研究で，母親の育児ストレスと有意差の得られた項目は，母親要因では，専業主婦，健康状態に不調がある，子ども要因では男児，出生順位の１人目，家族要因では，核家族であった。

母親要因では，健康状態が快調よりも不調の方が，育児ストレスが高く，前原ら（2014），中北ら（2015）の報告と一致していた。母親の健康状態の不調を軽減するための日常生活の工夫や夫・実母・義父母等の家庭内サポートや，友人や専門家等の家庭外のサポートの活用を促進する支援が必要と考えられる。

子ども要因では，子どもの性別では，男児の母親は女児の母親よりも育児ストレスが高く，井倉ら（2018）や桑名（2007）らの報告と一致していた。高濱ら（2006）は，母親が扱いにくさを認知する主な理由は，子どもの反抗30.9％，自己主張25.5％，慣れにくさ・過敏さ19.7％であり，これらが全体の約８割を占めていた。扱いにくいと認知された子どもは１歳では男女差がなかったが，２歳・３歳では男児が有意に多かったと述べている。また，井倉ら（2018）は０～１歳児，坂田ら（2014）は３歳児の母親を対象に調査を行い，男児の母親の育児ストレスの高さを報告している。本研究では中間期の１歳６か月の時期での子どもの性差と育児ストレスの相違が見られたことにより，子どもの性別や母親の認知する子どもの扱いにくさを把握し，育児ストレスを軽減できる支援を検討していく必要がある。

出生順位では，第２子以降よりも第１子の母親の方が，育児ストレスが高いという桑名ら（2007）の報告と一致していた。その一方で，初産婦より経産婦の方が育児ストレッサーならびにソーシャル・サポートのストレス反応への影響は大きいという報告（吉永ら，2007）もあり，子どもの出生順位だけなく，母親の年齢，就労の有無，家族形態，子どもの月齢や特性等，他の要因も含めて検討していく必要があると考える。

家族要因では，核家族は二世代家族よりも育児ストレスが高く，牧野（1982）の報告と一致していた。核家族化により，育児の伝承がなく，親だけで子育てを担わなくてはならない状況は，母親の負担が大きくストレスも高くなる。地域の児童館や保健センターの「子育て広場」等，社会サービスに関する情報提供を行い，母親同士の仲間づくりやリフレッシュへの支援が必要と思われる。

２．母親の育児ストレスと養育態度・夫婦関係との関連

本研究の母親の養育態度は，許容的態度が約半数を占めていた。中道ら（2013）は，2003年と2013年に養育態度の調査を行い，親の養育態度は応答的な側面が高まってきており，母親の肯定的な子育て意識の変化が影響を与えていることを述べている。ベネッセ教育総合研究所の第５回幼児の生活アンケート調査（2015）によると，子育ての肯定的な感情は15年間ほぼ変わらず，多くの母親が「子どもがかわいくてたまらないと思う」「子どもを育てるのは楽しく幸せなことだと思う」等の肯定感を持っていたことを報告している。本研究の母親の養育態度においても，このような育児への思いが母親の養育態度の応答性の増加をもたらしたのではないかと思われる。

権威的態度の母親は他の２つの養育態度と比較し，育児ストレスが有意に低かった。この結果は中川ら（2018）の結果を支持し，育児ストレスの低い母親は精神的に余裕があり，子どもとの関係や自分の育児を肯定的に捉えることができ，子どもと柔軟に関わり，成長発育に適切に応答する養育態度を持つことができる。その一方で，許容的養育態度の母親は育児ストレスが高かった。園田（2012）は，育児ストレスが母親の非統制的養育態度に影響する，中川（2018）は，権威主義的態度の母親は，他の２つの養育態度と比較して，育児への負担感が最も高いことを報告している。この２つの報告は幼児を対象としており，本研究の結果とは異なっていたが，これには養育態度の測定

方法の違いや調査対象の子どもの月齢の違いが影響していると考えられる。本研究の対象は１歳６か月の乳児で，子どもの成長発達にあわせたしつけを考え始める段階である。子どもの月齢が上がることにより，親側はしつけの必要性が出てくるのに対して，子ども側は自我が芽生え，言うことを聞かない，反抗するといった状況もみられるため，権威主義的態度のように母親が子どもにとって良いと思う行動を強制する養育態度が生じやすいと考えられる。

母親の育児ストレスと夫婦関係との関係について，佐藤（2012）は，母親が夫婦関係を高く評価していると，母親の育児中の肯定的感情が高いと考えられ，育児支援を行う上でも母親の夫婦関係の自己評価を知ることは重要であると報告している。また，堀口（2006）は，夫婦を対象に，夫婦関係と養育態度との関連について子どもの誕生時，５歳時に縦断的に調査した。その結果，夫婦間に葛藤や不満があると，子どもに対してあたたかい受容的な態度で接することが少なく，子どもが言うことを聞かないときにどなったり強く叱ったり，傷つくような言葉を言ったり無視するなど，きびしい非受容的な養育態度になる傾向が見られた。また，子どもが誕生した時点の夫婦関係が５年後の夫婦関係に影響を及ぼしており，子どもの誕生を迎えた時期の夫婦関係の質は累積して養育態度形成にかかわる可能性を示唆している。夫婦関係が不和であると心理的なマルトリートメントにつながりやすいことから，親になった夫婦は夫婦関係を良好に保っていくことが重要といえる。

社会生活基本調査によると，６歳未満の子どもを持つ夫の育児・家事関連時間は2011年から16分増加し2016年で83分，10年前と比較すると23分増加していた。男性の家事関連時間を諸外国と比較してみると，日本は先進国中最低の水準である（内閣府，2016）。このように，日本の男性は物理的に子育てをサポートする時間が限られている。妻が家事育児を一人でこなす「ワンオペ育児」の家庭も多く，時間に追われ余裕のない中で，夫婦間の葛藤が生じることも予測される。そのため，夫は育児家事に協力することよりも妻の育児をねぎらい評価し，情緒的に良好な夫婦関係を築くことのほうが，母親の育児ストレスの軽減にプラスの効果をもたらすと考える。

今回，１歳６か月健診において，初めての子育て，専業主婦，核家族，健康状態が不調，子どもが男児，母親の養育態度が応答性は高いが統制の低い許容的養育態度である，夫婦仲が上手くいっていない母親は育児ストレスが高いという結果が得られた。子ども虐待の発生予防のために，育児ストレスが高い親子を見極める目安として要因を活用し，支援につなげていくことが重要と考える。

３．研究の限界と今後の課題

本研究の結果は，限定された健診受診の母児であり，一地域の分析結果のため，対象集団全体を反映していると言い難い。育児ストレスには複合的な要因が関係している。今後は，母親が自分の母親にどのように育てられてきたかという被養育体験と育児ストレスとの関係についての検討をしていくことが課題である。

謝辞

本研究に協力いただいたお母様ならびに調査を行うにあたり，協力いただいた保健センターの保健師様に感謝します。

本研究において利益相反はありません。

引用文献

Abidin,R.R.（1995）. Parenting stress index.3rded. Odessa,FL:Psychological Assessment Resources Inc.

荒木暁子，荒屋敷亮子.（2015）. PSIスコアと関連要因．兼松 百合子編．PSIストレスインデックス手引き第２版.雇用問題研究会, 54-59.

Baumrind,D.（1967）. Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.

Baumrind,D.（1971）. Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, 4, 1-103.

ベネッセ教育総合研究所報告書.（2015）. 第5回幼児の生活アンケート, 211.

堀口美智子.（2006）. 乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度．家族社会学研究，17(2), 68-78.

井倉一政，宮﨑つた子，柳瀬幸子.（2018）. 0－1歳児を子育て中の母親の育児ストレスと母親・子どもの属性との関連.小児保健研究, 77(3), 261-267.

池田隆英.（2013）. 乳幼児をもつ女性保護者の育

児ストレスの労働形態別にみた多母集団同時分析．厚生の指標，60(3), 9-17.
池田弘子．(2001)．育児負担感に関する研究-育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連－．母性衛生, 42(4), 607-614.
加藤邦子，石井クンツ昌子，牧野カッコ，土屋みち子．(2002)．父親の育児関わり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から．発達心理学研究, 13(1), 30-41.
兼松百合子，荒木暁子，奈良閑美保他．(2006)．PSI育児ストレスインデックス手引き，社団法人雇用問題研究所.
厚生労働省報告書．(2017)．
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000173365_00001.htmltZb
(閲覧2019.7.1)
厚生労働省ホームページ．(2018)．
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000139067.html
子育て世代包括支援センター実施状況調査（閲覧2019.7.1）
桑名佳代子，細川徹．(2007)．1歳6か月児をもつ親の育児ストレス（1）母親の育児ストレスと関連要因．東北大学大学院教育学研究科研究年報, 56(1), 247-263.
前原邦江，森恵美，坂上明子他．(2014)．高年初産の母親の産後1か月におけるソーシャルサポートの体験．母性衛生, 55(2), 369-377.
牧野カツ子．(1982)．乳幼児をもつ母親の生活と育児不安．家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
内閣府．(2017)．少子化社会対策白書（:第1章出産・子育てをめぐる意識等, 25-26.
中北裕子，神尾直佳，吉原和恵他．(2015)．3か月児健診から2～7か月経過した時点の育児ストレスと3か月児健診時の問診項目および児と両親の基本的背景との関連性, 保健師ジャーナル, 71(8), 698-702.
中川智子，星野明子，志澤美保，桂敏樹．(2018)．幼児を育てる母親の養育態度の特徴と育児感情のとの関連．小児保健研究, 77(5), 469-475.
中道圭人．(2013)．父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響，静岡大学教育学部学校教育構造．静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学篇，第63号, 109-121.
坂田祥，成瀬昂子，田口敦子，村嶋幸．(2014)．幼児の行動特性別にみた母親の育児困難感とその関連要因．日本公衆衛生雑誌, 61(1), 3-15.
佐藤小織．(2012)．初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究:－育児初期の核家族に焦点を当てて－．日本助産学会誌，26(2), 222-231.
園田和子，武井修治，松成裕子．(2016)．幼児をもつ母親の育児ストレスに関する縦断的研究－１歳６か月児とその２年後の母親の育児ストレスの変化について－．小児保健研究, 75(1), 34-39.
園田菜摘．(2012)．母親の育児不安に関する研究:サポート，子どもの気質，養育行動との関連．横浜国立大学教育人間科学部紀要 I教育科学, 14, 41-47.
菅原ますみ，詫摩紀子．(1997)．夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について．精神科診断学, 8, 155-166.
高濱裕子，渡辺利子．(2006)．母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ－1歳から3歳までの横断研究－．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 1-7.
吉田弘．(2011)．育児不安研究の現状と課題．専修人間科学論集，心理学篇(2), 1-8.
吉永茂美，岸本長代．(2007)．乳児をもつ母親の育児ストレッサー，ソーシャル・サポートとストレス反応における月齢間の差と三者の関連-初産婦と経産婦の比較から－．岡山県立大学保健福祉学部紀要, 14(1), 1-9.